

月刊

地域保健

11
2013

●特集

食物アレルギー児を地域で支える

●フロントランナー

兼子いづみさん 《浜松市子ども家庭部長》

●ピープル

湯澤直美さん 《立教大学 コミュニティ福祉学部 福祉学科 教授》



静岡県
浜松市

兼子いづみ
さん

● 浜松市「子育て支援員」

地域保健活動の視点を忘れず、川上から川下までを見つめる

地域の人たちの「やらまいか精神」を大切に

浜松市は、静岡県西部、遠州地方に位置する政令指定都市。人口は80万人にも手が届き静岡県一、面積は全国で2番目の広さを誇る。また、2013（平成25）年7月1日に市制施行102周年を迎えた。

北には赤石山系が連なり、東に雄大な天竜川が流れる。南には砂丘が広がる遠州灘、西の浜名湖も有名だ。ウナギ、三ヶ日みかんは全国的に名が通り、織物業、楽器、製材などの産業もさかん。東海道新幹線、東名高速道路など都市基盤の整備とともに、繊維・楽器・輸送用機器の三大産業の飛躍的な発展も押さえておきたい。

「浜松市は、恵まれた自然環境と豊かな文化・伝統が都市機能とバランス良く調和する、新しい形の政令指定都市を目指しています」と笑顔で語るのは、兼子いづみさん。

兼子さんは保健師、看護師、助産師、精神保健福祉士の資格を持ち、現在は

浜松市こども家庭部の部長として、次世代育成課、青少年育成センター、子育て支援課、児童相談所、保育課を統括している。

自立したいという思いから 資格取得を目指した

浜松市に隣接する磐田市で生まれ育った兼子さんは、幼いころはおとなしく引つ込み思案だったが、スポーツは大好き。中学校ではソフトテニスに明け暮れた。

「スポーツは好きでしたが、勉強もほとんど、学級委員をしてみんなを引っ張るタイプでもありませんでした。ただ、将来何か資格をとって仕事をした」と中学生のころから考えていました。当時、女性の資格という看護師や保育士が多かったように記憶しています。限定した仕事への憧れよりも、とにかく自立したいという思いでした。



ね。母が保健師だったということもあり、祖母がよく、女性も手に職をつけて自立していかなければいけないと話をしていました」

看護学校で看護師の資格を取得した後、静岡県立厚生保育専門学校保健助産学科（当時、平成12年に閉校）に進学し、助産師と保健師の資格を取得した。



食物アレルギー児を 地域で支える

P12 食物アレルギーをめぐる最近の動き

◎今井孝成（昭和大学医学部）

P17 保健師が押さえておきたい 乳幼児期の食物アレルギー最新知見

◎〈インタビュー〉

大矢幸弘さん（国立成育医療研究センター生体防御系内科アレルギー科医長）

（取材）太田美由紀（ライター）

P26 アナフィラキシーへの対応 ～エビベン®の使い方を中心に～

◎中村俊紀（昭和大学医学部）

P28 行政・保健師へ期待すること

◎中西望映子（認定特定非営利活動法人アレルギー支援ネットワーク）

P34 市の「食物アレルギー対応マニュアル」改訂と保健師の役割

相模原市保育課保健師として

◎瀬戸昭子（相模原市健康福祉局こども育成部）

東京調布市の小学校で起きた食物アレルギーによるアナフィラキシーショック死亡事故をきっかけに、各地で食物アレルギーに関する勉強会や研修会が活発になっている。食物アレルギー児とその親は、周囲の理解も得られず、どこに相談すればよいのかも分からず、孤立し悩みを深めていることが少なくないといわれる。乳幼児のころから健康状態を把握できる地域の保健師には、親のグループを立ち上げたり、学校関係者と情報を共有したり、地域のネットワークを築いたりすることで、患児と親を支える役割が求められるはずだ。しかし、他の課題や業務に忙殺される中で、患児が保育所・幼稚園、小学校へと進むと、かかわる機会はほとんどなくなってしまうのが現状である。

特集では、食物アレルギーに関する最新情報を提供するとともに、地域の保健師への期待と要望、取り組みの好事例などをまとめる。保健師が食物アレルギーの問題で何ができるのかを考える契機としたい。



人と壁なく話ができる 浜っ子保健師に

保健師初日からの震災経験を経て

橘内恵美子さん(左)

鈴木沙友里さん(右)

●石巻市健康部健康推進課



文＝逸村弘美（ライター） 写真＝C.Kent



▲鈴木さんは大学4年時の実習で健康教育を。準備は大変だったが、充実の体験

一方、鈴木さんは福島県いわき市出身。橋内さんと同じ浜づ子だ。

ガッツリ人とかかわりたい

ではなく、病気になる前か、まだ回復の余地がある人にかかわることが大事だなど思うようになりました。そして高校2年の進路を考えるとときに保健師という職業を知り、迷わずこの道を選んだのだ。

「もともととは学校の先生になりたかったのです。高校のとき、将来何の先生になろうかと考えたときに、思春期の大変そうな生徒たちとガッツリかわれる小・中学校の養護教諭になろうと思いい、大学を選びました」

鈴木さんが進んだのは宮城大学看護学部看護学科。偶然にも、橋内さんも同じ大学の同じ科にいた。当時から顔見知りだったが、実習などで同じグループになることがなかったので、お

互いを詳しくは知らなかったという。

鈴木さんは養護教諭を目指していたが、3年時の地域の実習で保健師の現場を知り、住民に頼られ、親しまれている保健師の姿を見て、ときめきを感じた。

「道で『あー○○さん』と会話したり、向こうから声を掛けられたりするの、すごくいいなと思って、病院だと退院したら終わりになってしまうのが、私には寂しい気がしたのです」

お母さんが看護師だったこともあり、「いつかは人とかかわる仕事に」と常々思っていた鈴木さん。また、自営業のお父さんが糖尿病を患いながらも喫煙し、健診にもなかなか行っていないことも気になっていた。

「父のような健康課題を抱える人に、どうかかわつたらいいか、その技術を自分も持ちたいと思います」

鈴木さんは大学4年になる直前に進路を変え、保健師になる決心をした。



▲「大学時代は覚えることが多く、テストは難しい」半泣きで頑張った橋内さん

橋内恵美子さんと鈴木沙友里さんが石巻市役所に就職したのは2011（平成23）年4月1日、東日本大震災から21日目のことだ。県内で2番目に人口が多い石巻市の被害は甚大で、死者3000人以上、行方不明者400人以上、中心市街地の全域が浸水し、被災住家数は全住家数の76.6%にもなった（平成25年9月10日現在）。

ふたりが初出勤した日の市役所内にはまだ多くの避難者がいて、市民から

のさまざまな問い合わせの電話も鳴りやまない駆然とした状況だったという。

「先輩の指示で動くのが精いっぱい、それを『やらなきゃ』と四苦八苦しているうちに今になりました」

ふたりの笑顔は柔らかく、どんな話も明るく話してくれた。そして最後まで、自分から「大変だった」という言葉は出なかった。大変と思う余裕もないくらい、目の前にある問題に真摯に

中学のとき、父親が病気になるって

取り組み、一歩も引かない覚悟を持って現実に向き合ってきたのだと伝わる。

こんなにかわいくて柔軟な強さを持つひまわり保健師がどうやって誕生したのか、それぞれ追ってみよう。

橋内さんは、福島県相馬市で生まれ育った。8歳上のお兄さんは現在ケアマネジャーをやっているという。けれど橋内さんはそれに影響されただけではなく、子ども特有の憧れで「看護師さんになりたい」と思っていたそう。

それが保健師に変わった理由は、中学時代の悲しい思い出にある。

「父が肝臓癌になって、亡くなってしまったのです。自営業だったので、忙しくて年1回の市の健診で『要医療』になっても病院に行かなかつたのですね。それから、病気の人にかかわるの